

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(20 世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enoco のコレクション展)

馬屋原春香

(1) 展覧会作りについて

《参加の動機》

私が今回のインターンに参加したのは、大学で受講している学芸員課程の授業以上に、実際の学芸員の仕事を知りたいと思ったからである。資格を取得するための学外実習もありましたが、その期間は1週間程度と短く、多くの参加者のうちの1人として参加するものだった。将来、学芸員として博物館で働くことを志望していることから、このインターンを通して展覧会作りを経験したいと思い、参加することを希望し応募した。

《展覧会作りにあたって》

私が担当した第4章「レンズ越しの another—20 世紀の欧米写真—」は、コレクション数が100点以上にのぼり作家も多岐にわたっていたため、作品を選択することが何よりも難しかった。作品選択のために、第4章と一緒に担当することになった原田さんとオリエンテーションから定期的に集まり、SNSを活用しながら展覧会を作っていた。

7月2日のオリエンテーションの担当ごとの作業の時点で、展覧会作りをするのに当たって、やるべきことを3点決めた。1点目は写真史、特に20世紀欧米の写真史についての資料を探すこと。2点目はコレクションで挙がっている作家について調査すること。3点目に展示したいと思う作品を考ること。結果的に、この3点が、展覧会完成までの取り組みの軸になっていた。

《作品選択とコンセプト作りについて》

私は、大学では『万国博覧会における美術館の役割』について研究を試みているのだが、今回担当したコレクションの中には、1990年に大阪市で開かれた『国際花と緑の博覧会』に出展された後に、大阪府所蔵になったものもあり、オリエンテーション前に配布された作品一覧表は大変興味深かった。しかし、私は、現在所属している大学院から美術史を専攻し始めたこともあって、この研修に参加するまで、写真史についてほとんど知らない状態で、作品選択にあたって何を基準にするのかを考えることが難しかった。その中で、私

たちは、写真技術が誕生したところから、19世紀に芸術だと認められ、20世紀に様々な技法が試みられるまでを特に欧米に焦点を当てて把握できるよう取り組んだ。特に参考にしたのは、ヘル・ムート・ゲルンシャイム、アリソン・ゲルンシャイム共著、伊藤逸平訳『世界の写真史』美術出版社、1967年／伊藤俊治『20世紀写真史』ちくま学芸文庫、1988年／ジル・モラ著、前川修監訳『写真のキーワード：技術・表現・歴史』昭和堂、2001年である。写真史の流れを追ったことは、担当した4章のコンセプト作りや展示作品の選択にも役に立った。

第4章のコンセプトと展示作品の選択は同時並行的に行われた。20世紀の欧米写真家の潮流を明らかにしつつ、写真家が捉えた非日常の瞬間＝anotherを感じられる作品を選択しようとした。各作家のデータを集めて、写真史の中で重要と考えられる人物や作品を挙げつつ、コンセプトのanotherを感じられると考えた作品を選択した。振り返ると、この作品選択はかなり恣意的になってしまったと思う。タイトルとしても掲げた「レンズ越しのanother」というコンセプトの下で、記録の写真ではなく、肉眼では捉えることのできない一瞬を切り取ったような写真作品を選択したいという思いをこめた。

《展覧会作りについての反省点》

中間報告から最後まで、作品選択の意図やコンセプトを上手に文章化できず、最後の章パネル作成時に、学芸員の方の修正に頼ってしまったと思う。もっと人に伝わりやすく共感できるテーマ、コンセプトをしっかりと作ること、それが作品選択のためにも、鑑賞者のためにも必要だったと考える。

作品を選択するだけでは、展覧会を作ることができないと強く感じたのが、展示作業の時だった。展示構想では、チラシにも掲載された目玉となったエドワード・ウェストンの《裸婦》とその対比作品として選んだ《ピーマン》を隅に追いやってしまっていて、まったく目立たなかったのである。したがって、一番目立つところへと移動させることになったが、そうするとそこに置く予定だった作品をどこに動かすのか、そして歴史の流れを追うというコンセプトとの矛盾がおきないようにするには、どうすればいいか問題が溢れでてきた。美術品取扱い専門業者のカトーレックの方には何度も作品移動をお願いしてしまい、全体的な見栄えのチェックを学芸員の方に何度もしていただいた。一番の反省点は展示構想の詰めが甘かったという点である。そのため、的確な指示も上手くできなかった。





展示における的確な指示という点では、照明に関しても難しかった。作品に対する照度を 80~90 ルクス程度に抑える作業では、担当箇所の商品に対する照明の位置を主体的に指示することが難しかった。また、展覧会全体を暗すぎず明るすぎず鑑賞しやすい空間にすることの難しさも感じた。

《展覧会作り全体を通して》

課題も多く残ったが、コンセプトに沿う作品を選び、章全体がまとまるように、前の作品との繋がりを大切に並べていき、鑑賞者に見てもらいやすい展示にできるよう考えることは、これまで展覧会を観に行くだけでは考えたことのないようなことを考える機会となり、とても興味深い貴重な経験ができた。

(2) ピンホールカメラワークショップについて

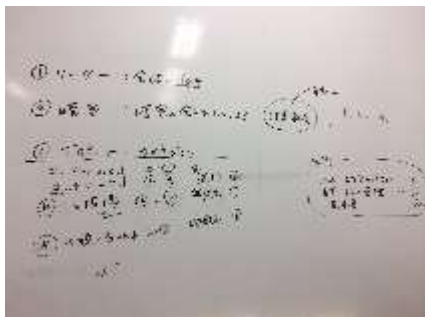
《イベントの企画について》

私は8月8日のイベントの企画を考える回とワークショップのためのレクチャーの回に参加することができなかった。8月8日のイベント企画で、私はプロのカメラマンを招いて、撮影講座を開催するというものを提案した。最終的にピンホールカメラのワークショップという形になって、大人も子どもも実際に自分のカメラを作ることができて、写真に興味を持てる企画になって、良かったと思う。誰を対象にするのか、誰がレクチャーするのかなどを考えると、幅広い年代の方に参加してもらえる上に、事前にレクチャーを受けた、インターン生たちがワークショップの主催になることで、複数回開催することも可能になり、振り返ると良い企画だったと思う。これからイベント企画を考える際の参考になった。

《ワークショップの開催にあたって》

私はレクチャーの回を欠席してしまったこともあり、ワークショップを乗り切ることが

できたのは、一緒に担当してくれた方々の協力と展覧会の展示作業の後のミーティングで話し合いを設けたおかげだと思う。



私自身がピンホールカメラを作ったことがなく、現像のセットからカメラ作りの過程まで、事前に丁寧に教えてもらえたことで、12月26日のピンホールワークショップでは、サポートの役として動くことが出来た。担当したワークショップでは、大人の方が10名と子どもが3名いて、年齢層の幅の広いワークショップになった。ワークショップを開催する側に立つこと自体が珍しく、子どもから大人まで行程を理解してもらうようにするのは、難しかった。

《ワークショップの反省点》

私の担当した日は、曇り時々雨という天候に優れない日だったことで、撮影時間が前回の開催日より大幅にかかる事態になってしまい、箱の大きさによって、撮影回数にばらつきが出てしまった。担当者の設定や早い組と遅い組に参加者を分ける算段も行っていたが、実際にはほとんどの人が同時に撮影し、撮影時間の短い人から現像に進むという形で、臨機応変な対応になっていた。私はほとんど外で撮影のサポートをしていたのだが、子どもの参加者の方につきっきりになる場面もあり、大人の方に対して細かな対応をできなかったと思う。また、現像のタイミングや最後の乾かすタイミングでもっと参加者の方たちと展覧会についての話をする事もできたと思われる。ワークショップに参加した経緯や展覧会を見た感想など生の声を聞く機会を上手く生かせなかったことは残念である。

これからワークショップを開催する機会があれば、ワークショップを開催までに起こりうる事態についてしっかりと話し合うことを大切にするとともに、当日はその事態にふりまわされず、参加者の方にとって最適な環境を作り出すためにも、きっちりとコミュニケーションを図れるようにもしたいと思った。

(3) 研修全体を通じた振り返り

今回の研修を通して、展覧会を作るためにはスケジュール設定の正確さと調査の重要性、そして協力体制が重要だと感じた。

《スケジュール設定の正確さ》

今回は、研修ということで、オリエンテーションの時点で大体のスケジュールを提示してもらって、展覧会開催までの下準備の大まかな見通しを確認できたとともに、7月から12月までの間に本当にこの膨大なコレクションの中から作品を選択しコンセプトを考えて、展示にたどり着くことができるだろうかと不安にも思った。研修では、定期的に課題が提示され、期日までにそれを仕上げることで、学芸員の方がまとめあげてくれたおかげで乗り切ることが出来たが、今後、自分が主体となって展覧会を開催できることになった場合、的確な計画を出すことができるようになりたいと思った。

《調査の重要性》

調査の重要性というのは、作品選択、コンセプト作り、展示に至るまで知識がなければ何もできないと感じたからである。知識がなければ、作品の選択はただの恣意的なもの、もしくは好きなものを展示しただけ、というものになってしまう。作家、作品についての調査が展覧会全体を違和感のないまとまりをもった空間にするために必要だと感じた。また、私は作品の制作年を覚えることが苦手だと感じているのだが、今回の研修を通して、改めて歴史の流れの中で作家、作品を捉えることが、学術的にも根拠のある展覧会を作るために重要なことがわかった。このことをこれからの学習の中でも意識しようと思う。

《協力体制》

今回は学年も経歴も異なる研修生で一つの展示を作り、ワークショップを開催するにあたって、協力体制が築けてなかったら、悲惨なことになっていたと思う。担当した4章では、細かに連携が取れていたと思う。ただ、実際の展示作業までは、章ごとの動きもいまいち掴めていなかったこともあり、そこはもっと定期的に連絡をとりあって進捗状況を共有すべきだったと感じる。各章ごとのまとまりをつけるのに留まり、その前後とのつながりを章パネルの中に取り込むこともできなかった。コレクション展ということで、多様な作家、作品が集まったからこそ生み出せたまとまりがあったようにも感じてい

る。

《振り返り》

以上のように、研修を通して、展覧会を作るためにはスケジュール設定の正確さと調査の重要性、そして協力体制が重要だと感じた。一方で各行程の中で調査不足や文章化の未熟さ、そしてまだまだ展示に関しても、写真史、美術史に関しても知識量が少なすぎるという課題も見つけた。これらの課題を意識して、今後の活動に活かしていきたいと考える。ここまで、主体的に展覧会のために動くことができ、大学の博物館実習ではできない貴重な経験をさせていただいた。